よみがえる「池田城」の興亡 その2

2月1日号に引き続き、戦国時代に栄枯盛衰を物語るドラマの舞台となった、池田城の様子について紹介します。

③池田城はなぜなくなったのか

荒木村重の台頭

荒木村重は丹波波多野一族の出身と言われ、父の高村とともに池田氏に仕えていました。永禄年間（1558～70）、城主池田勝正のころ、村重は力をつけはじめ、やがて「池田二十一人衆」の一人にまでなりました。

元亀元年（1570）、池田氏が信長の家臣として各地を転戦させられていたころ、反信長派の「池田二十一人衆」が信長派「池田四人衆」のうち2人を殺害、勝正を追放するというクーデターを起こします。このクーデターで村重は池田を支配下にしてしまいました。

その後村重は、高槻の和田氏、茨木の茨木氏を滅ぼし、さらに信長に取り入って室町幕府滅亡に功を挙げて「摂津守」に任じられるまでになりました。そして、天正2年（1574）伊丹城を落とし、ここを有岡城と改めて居城にしたため、池田城は廃城になったといわれます。ちなみに、『中書家久公御上京日記』の天正3年4月に「（略）亦左方に池田といへる城有り。今はわりて捨てられ候」という記述があり、このころには池田城は廃城の状態になっていたことが分かります。

荒木 村重
（『太平記英勇伝』、伊丹市立博物館蔵）

なぜ池田城から伊丹城へ移ったのか

村重は伊丹へ移った後、城の改修とともに伊丹の町づくりを行います。それは城とともに町の周囲も堀・土塁で囲むといった「総構え」を行い、その中に町屋、武士居住区の区分を明確にした、近世城下町の初源的形態を有するものでした。村重の町づくりは、町への支配を貫徹させ、総構えによって防御をより頑丈なものにするためでした（後に信長が有岡城を落とすのに1年も要したのは、この総構えのためです）。

では、村重はなぜ池田でこうした町づくりを行わなかったのでしょうか。

『細川両家記』天文18年（1549）に

「一、同正月廿四日宗三、多田衆引催候て池田、市庭放火するなり

一、同二月十二日に越水より伊丹へ取懸。近郷放火させられけり」

とあります。この記載から、池田には以前から「市庭」すなわち「市」が開かれる町屋があり、一方、伊丹には「市庭」の記載が見られないことから、町屋としての広がりが小さかったと思われます。

市の開かれる場所は、だれの支配からも侵されない「公界」すなわち自由な場であり、本来、領主の支配権が及ばない場であったといわれています（小島道裕「戦国城下町の構造」『日本史研究』257号）。恐らく、既に町屋が広がっていた池田に比べ、町屋が比較的小さく、集落が散在していた伊丹で町づくりを展開する方が、村重にとってやりやすかったのではないか、と想像されます。

もう一つの理由は、池田の地理的な要因があるのではないかと思います。伊丹は西摂平野の中心に位置し、当時の幹線道である西国街道にも接し、大阪湾も比較的近くにあります。しかし、池田は西国街道から離れ、西摂平野の中では大阪湾から最も奥まった位置にあります。一方、村重配下の摂津国の武将について見ると、摂津国の東端に位置する高槻城に高山右近、茨木城に中川清秀、南の尼崎城には村重の嫡子村次、西端の花隈城（神戸市）に荒木村正を配置しています（右図）。

【摂津国の城郭位置図】

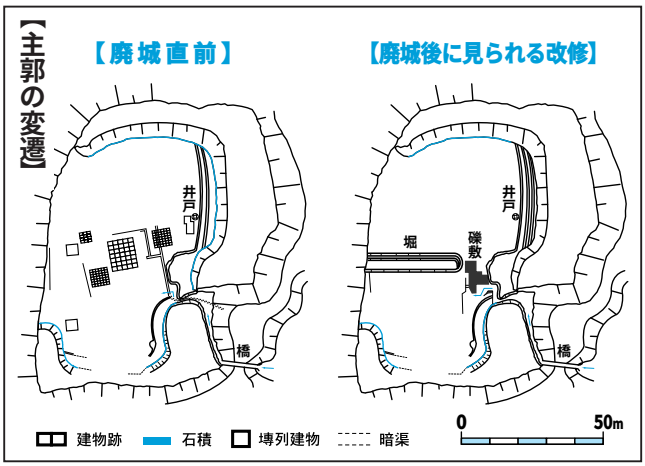
〈6面へ続く〉

伊丹の位置と各部将の配置を見ると、安土の織田信長を牽制し、当時、海上ルートで信長と敵対していた毛利氏とつながりを持つことができます。これらのことから、これは後に村重が信長を裏切るため結果論にはなりますが、村重は「摂津守」に任じられ、厚い信任を受けていたものの、信長を油断ならない存在として見ていたのではないか、言い換えると、信長を念頭に置いて摂津の防御を固めるためだったと想像されます。

村重が伊丹へ移った理由ははっきりしませんが、こうした想像はいかがでしょうか。

再び池田城が登場

天正6年（1578）、村重は信長と敵対していた本願寺と手を結びます。怒った信長は村重を討伐するため、有岡城に包囲網を敷き、自ら「古池田」に陣を敷いたと『信長公記』にあります。発掘調査によれば、主郭の最後は建物がなくなり、中央を東西に堀を掘って、主郭を南北二つの曲輪（くるわ）に分けていたようです。これは、主郭の防御をさらに高めるとともに、少ない人員でも防御が可能となる構造で、既に廃城になっていた池田城、すなわち「古池田」に手を加えて陣を敷いた時の姿を示しているものと考えられます。

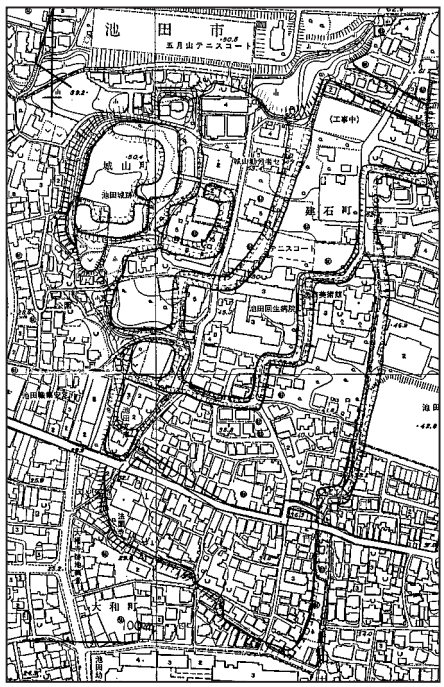


④ 池田城と町屋

池田にも総構えがあったか

前にも述べたように、伊丹では村重により総構えが行われました。また久宝寺（八尾市）や富田林など、寺を中心に発達した畿内の寺内町は、古くから町の周りを堀や土塁で囲んでいました。では、池田にも総構えがあったのでしょうか。

『信長公記』によれば、永禄11年（1568）、信長が池田城を攻撃する時、町に火をつけたことが落城の契機になっています。町を突破することが落城につながっているのなら、池田にも総構えがあった可能性もあるのですが、今のところ、これを証明する資料はありません。今後の調査研究にゆだねられるべき課題といえます。



【池田城の城域】

城にはだれが籠（こも）るのか

城には池田氏とその家来が籠るのは当然と考えられるのですが、果たしてそれだけだったのでしょうか。右図を見ると、城主のいた主郭に城主とその一族、有力家臣たちがたて籠るのは予想がつくのですが、城域の東と南にあるスペースが主郭以上に広くなっているのは、何のためのでしょうか。

このことを考えるのに、参考になる事例があります。関東の例ですが、豊臣秀吉が城を攻撃した時の様子を記した文書に「（敵の）城の中には町人、百姓、女しかいない」とあります。また、当時日本に来ていた宣教師は「日本では、戦があったとき、町人や百姓らは城へ逃げるしか助かる方法はなかった」と報告しています（藤木久志『戦国史をみる目』校倉書房）。これらの事例から、もしかしたら、池田城にある広いスペースは、戦の時、池田の町の住民たちが籠る場所として機能していたのではないかと推定されます。

前に、領主は市の立つ町屋に支配が及んでいなかったと述べましたが、あるいは、そこには支配・非支配という強い上下関係ではなく、町屋の住民からすれば、税または城普請を負担するが、領主はその見返りとして住民を守る義務を負う、という対等な関係があったのではないか、と思われます。

以上、2月1日号に引き続き、池田城について、発掘調査の成果や記録から想像を交えて記してみました。池田城跡については、まだまだ分からないことが多くあり、今後の発掘調査などで徐々にではありますが、明らかになっていくことと思います。

問い合わせは社会教育課（☎54・6295）